

戦後社会運動史資料論 鈴木茂三郎(3)

鈴木 徹三

はじめに

- 1 「ニワトリからアヒル」へ
- 2 国会証言録
- 3 日本社会党創立期(以上, 517号)
- 4 民主人民戦線の提唱と「山川新党」(以上, 522号)
- 5 片山・芦田内閣前後
 - 2・1ゼネスト/共産党との絶縁声明/有沢広巳経済安定本部長官/0・8補正予算問題/『歴史と神戸』河合義一氏のケース/片山内閣の崩壊(以上, 本号)
 - 社会党の再建, 第一次分裂, 講和三原則(以下, つづく)
 - 片山・芦田内閣時代
 - 汚職と崩壊 - 芦田内閣

5 片山・芦田内閣前後

2・1ゼネスト

1947(昭和22)年1月22日, GHQのマーカット, コーエンはゼネスト中止を警告。社会党は23日の中執で左派5人の反対を押し切り回避へ。28日中労委斡旋案, 総同盟の高野実は離脱, 産別の細谷松太も消極的となる。高野, 細谷は倒閣に熱意, ゼネストには執着せず。31日マッカーサーの禁止命令(増山太助『検証 占領期の労働運動』93.9)と, 騒然たる事態を迎えた⁽⁷⁾。

スト中止に関して, 最高責任者の一人である伊井弥四郎は, 放送局の廊下で徳田から「ストをやめると放送しろ」と言われた, と証言した。しかし, 鈴木市蔵『証言 二・一ゼネスト』は, 徳田

* 故・鈴木徹三氏の遺稿掲載にあたって

本号および以下で, 故・鈴木徹三氏の遺稿を掲載する。鈴木徹三氏は, 2002年6月4日に逝去された。享年79歳であった。同氏のご逝去を悼み, 本誌には, 早川征一郎「鈴木徹三先生のご逝去を悼む」(『大原社会問題研究所雑誌』2002年8月号)を掲載し, 追悼の意を表した。

鈴木徹三氏は, 生前, 「戦後社会運動史資料論 - 鈴木茂三郎(1)(2)」を執筆された。それは, 本誌2001年12月号(517号)および2002年5月号(522号)に掲載されている。とくに(2)の執筆・掲載後, 病状がきわめて

は放送局には姿をみせず、徳田専用車の運転手の金良清一証言によりお濠端で車をとめ、「三〇日の夜一時近く、徳田は切々と伊井に情勢を説明して、このままゼネストに突入するならば、いっせい弾圧はさけ難い。わが方の力をはね返すだけ強くない。労農同盟も、統一戦線も未成熟である。ここのところは一步退却して、二歩前進をはかるのが賢明だと思う」と述べた。長谷川浩らも放送局説だが、その根拠は示していない。

大森実『戦後秘史』の確か第4巻だったと思うが、GHQ経済科学局労働部長T. コーエンとメキシコで「直撃インタビュー」を行い、鈴木証言が正しいとの答えを引き出した。茂三郎は、当時の共産党系運動家として鈴木市蔵を評価していた。おそらくその証言を信じてよいのではなからうか。(チーフという肩書は日本にはなく、部長、課長、係長など訳書によって異なり、なるべく原訳に従った。)

これに関して、三戸信人氏から鈴木市蔵の『共産主義者の光と影』(現代研究所、非売品、98.7)をお借りして読んだ。いわば2・1ゼネスト余話ともいうべきものである。

スト当時、中央闘争副委員長だった彼は、64年に公労協のストに共産党が反対した「四・八声明」

悪化するなかでも、なおも続編を執筆されていた。遺稿となったその原稿は、夫人の鈴木玲子氏、ご子息の鈴木徹太郎氏によりパソコンから発見され、研究所側に渡された。

編集委員会は遺稿を検討した結果、この遺稿をつぎのように取り扱うこととした。すなわち、同遺稿については、すでに生前(1)(2)が掲載されており、さらに、その続編が掲載されることによって、論題についての叙述が完結し、作品として一層、意義が増すことを考慮し、これを遺稿(3)(4)として掲載するということがあった。

そのうえで、遺稿掲載にあたって、編集方針についても確認した。すなわち、遺稿として、できるだけ原形を保つことを第一義とする。そのため、遺稿の文意が分かりづらい箇所もあるが、それには解釈を加えた補正を行わず、そのままにした。ただし、人名や固有名詞の明らかな誤記や漢字変換ミス、人名などの表記の不統一について必要最小限の補正を行った。また、遺稿(4)の目次には、番号が付いていないものと番号が付いていても前と連続しないものがあるため、敢えて番号を付けないこととした。

遺稿(3)(4)には、まさに闘病生活の最中の執筆であることが如実にうかがわれる「まえがき」がある。鈴木氏が、重い病のなかでも、この原稿にいかに心血を注いだかを示すものとして、それらも省略せず、以下に掲載する。(編集部記)

「最近、入退院を繰り返して、『資料論』を書きつづけることも難しくなった。そこでまた再転換、メモをつけて大原社研へ資料を追加寄贈することを最優先課題とし、余力があれば『資料論』を少しでも書きつづけることにした。以下、既に執筆済みの部分の他は、かねてからこれだけは書かねばと考えた事項に限定させていただく。

それぞれの問題の時代的背景、社会党その他の運動史に書かれていることは省略する。時には順不同になったり、専門家の研究により既に解決済みのことを取りあげるかも知れない。極端な場合には、せめて個条書きにすることすら考えている。外出禁止を条件に4月20日に退院し、翌日からワープロをポチポチと打ち出した。というのが実情であり、多少のご不満はお許し願いたい。」

(7) 京都社研連の委員長を辞任し、私は京都社会主義学生同盟を組織した。学生らしくゼネストをやれば面白いが、どうせ潰されるだろう、と予感がした。同盟員には、万一ストの場合は京都駅に集合と指示したものの、時間、場所も決めなかった。地方にいと、周囲の雑音に惑わされず、冷静に事態を眺めることが出来るものである。

を党と組合の関係を踏みにじったものと批判した。挑発ストは政府の思う壺なので中止せよとの声明の発案者は聴濤克巳だった。党指導部は自己批判せざるをえず、野坂以下は宮本に頭をあげる事が出来なくなった。スト反対声明を書かされた伊井弥四郎も失脚し、聴濤は悶死した。

その後、不破委員長はソ連が志賀義雄らを使って反共産党運動を行っていると言われ、志賀らを除名し、平和・原水禁運動を分裂させた。市蔵は志賀に同調したと除名し、フルシチョフを修正主義者として非難した。「荒畑寒村がいったものだ。退屈しにぎにTVをいれるといつのまにか『水戸黄門』になるんだ。こんなこしらえものと思いついてしまう、と笑いあった。その解説は深刻だったね。これは天皇に通ずるんだよ。心のなかの、ウチなる天皇に通ずるんだな。戦前の転向は、みんな天皇に負けたんだ。天皇制ではなく、ウチなる天皇に負けたんだ。つまり氏神に負けたんだ。『32年テーゼ』はこの点で大きな誤りをおかしたと思う。ロシアのツアーと天皇制を同一視し、民族的特性を無視したところにある」と志賀が市蔵に語ったそうだが、いかにも寒村らしい表現が面白い。

共産党との絶縁声明

1947（昭和22）年4月の総選挙で社会党は143議席を獲得し、第1党になった。4党連立内閣が問題となり、その後社会党が惨敗した時の選挙資料によると、商工大臣（何度も指摘しているのにどうして「大臣」という封建的な名称をいまだに用いているのか）のポストを示されたが、4党連立に反対の立場から鈴木は断った。

第2党の自由党は、古島一雄らの進言により、吉田茂は連立入りを拒否した。

5月15日、鈴木・加藤は連名で共産党に対する絶縁声明を発表した。いかにもタイミングは悪かった。加藤宣幸氏は、声明を出さなくても閣僚になれたのに、物欲しげで不味かった、と評した。広沢賢一氏は「あれはシヅエがやったんだ」と解説した⁽⁸⁾。

森正蔵『戦後風雲録』（鱒書房、55.12）によると、保守派の一部から「社会党左派は共産党の手先である」という宣伝が行われた。5月8日の日本経済新聞は、AP支局長ラッセル・ブラインズ筆になる「共産主義勢力が政府に入りこむ可能性もある」という記事を載せた。鈴木は加藤と相談し、「左派は共産党と別個の主義・方針・組織をもつ」との一文を草し、西尾談として発表するよう依頼したが、西尾はこれを黙殺した。

(8) 広沢氏は「テレビでシヅエが鈴木さんは少しおつむが弱かった、と話していたぞ。あれを放っておいてよいのか」と憤慨して電話してきた。「百歳を超えた老女の発言などは無視すればよい」と答えた。一度でもお会いすると、悪口を言いくくなるので、そういう人から聴き取りを行わないように注意してきた。シヅエさんにも会わないようにしてきたが、加藤勘十さんを自宅に訪れると、夫人が当然茶菓をもてなしてくれることになる。勘十さんの死後、「こちら加藤です」と電話がかかってきた。「失礼ですが、どちらの加藤さんですか」と確かめると「シヅエです」と。とりとめもない話だったが、先手をとられた恰好になってしまった。

そこで鈴木は研究所の布施 禰一の名で「ブライズ氏の誤解をとく」という外人記者団むけの声明文を書かせた。その内容も「左派は共産党とは違った主義にたつ。民主戦線をこれまで唱えてきたが、2.1ストにおける共産党の破壊的態度や選挙戦の激しい対立は、両者の感情的対立を招いた。今後左派は共産党との関係を絶って進む」という程度にとどめた。14日に加藤シヅエの通訳で加藤・鈴木が外人記者団と会見し了解を求めることを決めた。

しかし、夫君を大臣にしたいとの一心も働き、国際的反共の空気がシヅエ女史を動かした。女史の入手する悪情報は直ちに加藤に伝えられ、更に鈴木のもとに達した（私自身も、鈴木に頼まれて愛知県遊説中の女史に、その後のGHQの動きを伝えたことがある。内容は記憶していないが、何かGHQ代表に説明しているような気がした）。

女史からの情報を信じ、保守派に左派の存在を理由に社会党首班内閣を阻止させないために、共産党が今後どのような弾圧にあっても社会党左派に波及しないように、共産党との間に明確な一線を画するという歴史的声明を、14日夜、外人記者団に発表した。記者生活の長い鈴木が、この声明は外人記者団どまりだと信じたのはおかしいが、うまく言いくめられたのだろう。しかも通訳はシヅエ女史、輪をかけて自己の反共的立場を強調した。何を喋っているのか、加藤、鈴木には分からなかった。

電波は世界を一周し、16日には外電の打ち返しが都下の各新聞に掲載された。驚いたのは、当の加藤、鈴木だった。

以上、長々と森氏の解説を紹介した。当たらずとも遠からず、という所だろう。

さらに、セオドア・コーエン『日本占領革命 下』（TBSブリタニカ83.12月）によると、5月のある夕べ、加藤と夫人がコーエン労働課長を訪ねてきた。社会党と民主党との連立内閣で、閣僚ポストにつくべきかを聞きたがった。亀裂は彼らの家庭のなかにあった。勘十自身は閣僚就任に極めて不安を覚え、シヅエは全く賛成で、彼が善良な市民とするよう私が励ますことを望んでいた。私は励ますことは避け、米国は自由な私企業を信奉しており、先の選挙で保守派が勝利をおさめ、自分たちが援助している国が社会主義へ移行することを認めるかどうか。節操ある社会主義者としてなぜ内閣入りを急ぐのか、と説いた。

加藤はおおむね思慮ぶかげに黙ったままだった。大半の話はシヅエがした。多くの票を獲得した社会党が統治を拒否すれば、国民は社会党を信頼しなくなる。資本主義者の民主党が社会主義に同調するのに問題はないと考えていた。私はシヅエの話聞きながら、鈴木と加藤との考えの違いであっても、彼女との違いではあるまいと考えた。加藤は片山内閣に入らなかったが、芦田内閣の労働大臣となりシヅエを喜ばせたが、1年とたたないうちに彼の政治生命は破局をむかえた（141～144ページ）。

「この話は労働大臣になる時のこととと思っていた」と加藤宣幸氏に言うと、慚然とした顔で「これが事実です」と答えた。

共産党との絶縁声明の裏には、森氏が指摘したような事実が潜んでいたのである。

いずれにせよ、同年の終わり頃、共産党は秘密幹部会議をひらき、野坂の平和革命論から徳田の暴力革命論に転じた、と聞いている。

晩年、鈴木は当時を回顧し、「絶縁声明」の背景として、共産党との二重党籍問題をとりあげた。

左派の拠点だった青年部のみならず、議員にも隠れ共産党員がいる。2・1ストまで加藤、黒田はそのフラクションだった、と労大で講演を行った。

すでに拙論でこの問題にふれたことがあるが、構造改革問題で党を除名された同僚の今井則義教授から、青年部、本部書記、研究所員のうち党員の名前を教えてもらったことがある。「帝国大学」の学生という特殊性もあり、私の学生時代は友人の多くが「共青」に入っていた。煮え切らぬ水谷長三郎の社会党よりも、活発な共産党に惹かれるのは当然のことといえよう。従って、その数が予想以上に多くても驚かなかった（「帝国大学」でマルクス主義者になり、卒業後は体制派になるのが通常のコースである）。社会党の議員クラス以上は幹部しか知らないと聞き、志賀義雄さんにうかがうつもりだったが、果たせなかった。

加藤宣幸氏によると、勤十氏が入党することなど考えられないことである。その通りであろう。また、加藤、黒田両氏をよくご存じの古い運動家の多くは、二人とも共産党に利用され、そのフラクション的役割を演じたのではないかと回顧された。但し、京大の故渡部徹教授は黒田党員説を強調し、その根拠を説明された。

その他、社会党の方針に反し、明らかに共産党の線にそってその指示どおり行動した何人かの議員は、二重党員だったと推定しうる。

最初に紹介した本部書記会の会合で「あれはどうしようもない筋金入りの共産主義者」だと評された人を、たまたま私は個人的に良く知っていた。熱心な社会主義者で社会党員だった。派閥的な立場からみれば、逆に共産党員と決めつけることになるのか、と慨嘆させられた。

難しいのは、鈴木の前代秘書広沢氏のケースである。今井氏は党員と明言し、伊藤好道氏も研究所時代、「あれは党員だから気をつける」と注意を促していた。鈴木も半信半疑ながら疑っていた。広沢氏とは個人的に親しくしているので、率直に問いただしたことがある。「共産党のシンパだったが党員ではなかった。大体岡田春夫の線だったと思ってくれればよい」との返事だった。最近、彼は共産党に戻った。「お里がえりしたね」と冷やかしても苦笑するだけである。

有沢広巳経済安定本部長官

池田内閣の終わり頃だったろうか。日本経済政策学会の全国大会が関西で開かれた。その初日の全体会議で某省の某氏が基調報告を行った。戦後の日本経済において、ただ一つ経済政策の名に値するものは、有沢広巳氏の傾斜生産方式だけである。岸の後を継いだ池田さんの所得倍増論は、何かよい資料はないかと官僚に探させ、数年たてば所得が倍増するという推計をみて、よし、これでいこうと決めたにすぎない、と。

安保闘争の高揚をみて、これからは経済で対抗しようという問題をすりかえた池田の政治的判断は間違っていなかった。高度経済成長の前に市民運動の勢いは急速にそがれていった。

かつて拙論で述べたように、有沢広巳氏が片山内閣の安本長官に就任していれば、おそらくこの内閣の崩壊は今少し延ばしえたのではなからうか。

当時、自ら講座派の嫡流と称していた京都の堀江英一氏と絶えず議論していた私がようやく大学を卒業し、東大の大学院生として有沢広巳さんの指導を受けたのは47（昭和22）年の秋だった。それまでは、上京した時にお目にかかったり、鈴木の手紙などで有沢氏の行動の一端を察知する程度

であり、いわんや吉田茂やGHQとは縁がなかった。

46年5月、第一次吉田内閣が生まれた。蔵相に大内兵衛、農相に東畑精一、経済安定本部長官に有沢広巳、各氏が懇請されたがいずれも断られた。農相には和田博雄が抜擢された。

おそらく和田農相あたりの入れ知恵で、吉田を中心とする昼食会が月に何回か開かれ、和田、有沢、中山伊知郎、東畑、白州次郎氏らが出席した。ある日マッカーサー元帥から必要物資のリストを出すよう言われ、有沢氏は出炭量を3千万トンに増やせれば、工業生産を一挙に戦前の50%以上にできると主張した。名案ということで有沢氏を主任とする石炭委員会が発足し、大来佐武郎、後藤誉之助、稲葉秀三らがこれを助けた。

これらはすべて後で聞いたり調べて知ったことである。傾斜生産方式の推進といった事情がからんで、再び有沢さんに経済安定本部長官になるようにとの話が持ちこまれた。鈴木から「有沢さんの就任に大内さんや高橋君が反対するのは何故だろうか」と聞かれたのは、この時だったろうか。鈴木自身は、日本経済の自立の為に引き受けるべきだと考えていたようである。

その後、大内さんらも了承し、有沢さんから鈴木あてに承諾せざるをえないとの連絡があった。しかし、この話も壊れた。「何故断ったのですか」とかなり時がたってから当人に尋ねた。「それは最後の条件だよ、石橋蔵相を辞めさせるという条件の実行を引き延ばそうとしたからだよ」と淡々と答えた。いかにワンマンといっても、石橋の背後には鳩山一郎が控えており、簡単に辞めさせるわけにはいかなかったのだろう⁽⁹⁾。

22年6月1日、社会党、民主党、国民協同党の3党連立で片山内閣が成立した。吉田の自由党は野党にまわり、これに参加しなかった。

これより先の5月11日付の「鈴木茂三郎様 親展 有澤廣巳」という書簡が保存されている。

「拝復御手紙拝見。安本入りを決心することはなかなか困難だが(主として学校との関係で)片山首班内閣が出来、左派からも入閣するといふことになって交渉があつたら、断る理由がないと考へてをります。それでその時には安本の性格を出来るかぎりハッキリさせるために、高橋君に副長官を引き受けて貰わねばならぬと考えてゐます。西尾氏が和田君を引き出さうとしてゐるさうです

(9) 大学院の学生に、政策立案の具体的な話は不要と考えられたのだろう。ほとんどその種のことは教えてもらわなかった。その代わりに「小坂善太郎(或いは小坂徳三郎だったかも知れない)がネ。これからは修正資本主義の時代だと僕にいうんだ。ついては良い種本がないかというのでドイツ語の本を貸してやった。ドイツ語は読めないから誰か紹介してくれ、と頼まれた。金になるからやらんかネ」と言われた。小坂といえば、鈴木と選挙を闘うことになる人間。「それは出来かねます」と断った。それにしても、少し幅が広すぎて困った先生だと思った。

高橋正雄さんに会った時、何か読まなければいけない本がありますが、とお尋ねした。英文で分厚い『フッガー家の歴史』を貸してくれた。何の因果でこんな本を読まなければならないか、とにかく意地になって読んだ。学生時代、大内兵衛さんを京都にお呼びした。代わりに高橋さんが来られて、レーニンではなくトロツキーの話をされ、一同をケムにまいた。そういうツムジ曲がりの所が昔からあったのではなからうか。

原理的研究については、向坂逸郎氏の歴史科学研究会に入れてもらった。何故、歴史を勉強しない研究会なのか、よく分からなかった。林健太郎氏の『昭和史と私』(92年、文春)を読み、漸く理解することができた。研究会には東大その他の若手教授らが集まり『資本論第2巻』、『経済学教科書』などを読んだ。

が、和田君が出れば、小生個人としては大助かりです。尤もさうなっても、この二月のやうに小生も何らかの名義で相当の援助をしなければならなくなります。

*コノアタリノ『欄外』ニ『中山君はダメです。高瀬長官の問題で官僚の間に信用を失ってしまったから』ト記入シテイル

経済危機の点から云へば自主的な危機突破の可能性は今度が最後のものとなるでせう。ここで失敗すれば、今後はただアメリカの巨大な援助がなければ成功の方法がなくなるでせう。恐らくタッパー氏が云ってゐたやうに、日本国民は実物教育を受けなければ立ち直れないところまでゆくこととなりませう。

そこで社会党としても、特に在野に廻るときには、又そうでなくても、相当の妥協をするときにも、党の主張は主張として、国民の前にハッキリさせておいて貰いたい。この点は今後の展開にとって大変重大だと思われる。

十二日はまだ東京へは出られそうもありません。十三日（火）午後学校へゆきます。夜は本郷の中園氏宅に泊まります。その時、連絡をとった上でお目にかかり、いろいろとお話を伺ひたいと存じます。今度とは出るときにはすったもんだといふことをしないで、さらりと出たいので豫め十分用意を整えておきたいと思ひます。

万事はお目にかかった上で

五月十一日

鈴木 茂三郎 様」

君達は中立というが、日本経済の自立なくして中立はありえない。今自立できなければ、日本はアメリカの経済的従属国になってしまう。大学院時代、有沢さんの持論を絶えず聞かされた。今改めてこの書簡を読み直し、懐かしさに堪えないものがある。

おそらくこの有沢構想が実現する為には、単に社会党のみではなく、連立各党の強力な支持が必要だったろう。

しかし、いざ政権を目の前にすると、将来をも視野にいれた各党の利害関係の対立、自党内部での権力闘争すら表面化せざるを得ない。有沢構想などは儚い夢となった。

4党政策協定が社会党から示され、民主党から修正案が提案され、社会党からみれば大幅な後退となった。さらに吉田は社会党左派を入閣させるならば協力できないと条件をつけ、野党に廻った。また、民主党は自由党と組んで「連立3条件」をつけてきた。4党政策協定、「連立3条件」に身体中を縛りつけられたまま6月1日に片山連立内閣が発足した。

大竹啓介の大著『幻の花』には至るところに「筆者への直話」という表現が使われている。「直話」といった方が真実により近いと信じていたのであろう。しかし、「直話」には著者の聞きたい人に会って、聞きたいことだけを話してもらう。その談話が真実か否か、を著者が自分で判断する余裕がないという陥穽に陥りやすい。社会党のことをほとんど知らない氏にとって無理な注文かも知れないが。例えば、同じ日の『朝日新聞』と『読売新聞』とでは、全く異なった観点から報道している場合によくぶつかる。氏はためらわずに和田に有利な内容を選ぶ傾向がみられる。

ここで著者ではなく、朝日新聞論説委員室に謝罪したいことがある。企画院事件の時、看守から

鈴木も転向したというくだりである。私が平常聴き取りを行ってきた方は、いわば筋金いり、少なくとも針金いりの運動家である。和田はこの事件で初めて検挙され、生来の傲慢な態度で看守に接したために、いじめぬかれたことを後で知った。誰でも獄中生活を経験すれば云々は、和田の場合にはあてはまらないことに気づいた。改めてこの箇所を訂正しておきたい。

当然、社会党左派排除、和田博雄安本長官の起用に鈴木らは反対した。佐多忠隆は「直話」で大竹に非難している。

しかし、「ひいきの引き倒し」になっては困る。和田氏の名譽のために指摘しておきたいことは、安本長官は有沢氏以外にないと信じて、稲葉秀三と二人で片山の説得に出かけたのは和田その人である。約2時間、経済情勢を話しても、有沢さんでは困る。どうしても和田氏になってもらわねば、とほとんど泣きだしそうな顔をしながら和田氏を口説く。その時、稲葉氏は「和田を長官にすれば、吉田が閣外協力をしてくれるというスケベ根性をだしたな」と感じたそうである。さらに1時間半、片山はひたすら和田に頼みこみ、根負けして和田は引き受けた。西尾が最初から有沢長官に反対し、吉田が直接片山に頼みこんだことも、後で分かった。

吉田には片山を助けるつもりは毛頭なかった。ひどい目にあったのは、和田長官と戦後経済調査会で有沢が注目した都留重人だった。吉田の推薦、背後にはGHQがついている目障りな安本、閣議といえば事実上次官といってもよい都留が膨大な資料を積み上げて喋る。特異で邪魔な存在だった。片山はポーッとしているだけである。和田は片山だけは人格者で信頼しうる人物だと思ったが、人格者だけでは何の役にもたない。

有沢氏は安本の顧問の一人となったり、5ヶ年計画の策定をしたりした。片山内閣の石炭の国家管理にも、僕はなんの関係もなかった。大体、片山内閣は積極的な産業政策をもたなかった。施策もタイミングが合っていなかった、と評した。おそらく、あの寄り合い世帯では、氏といえども、手こずったのではなからうか。

例えば、片山内閣の新外相芦田均は第8軍司令官アイケルバーガーに「米国と日本との間に特別の協定を結び日本の防備を米国の手に委ねること」「日本の独立が脅かされるような場合、米国側は日本政府と合議の上、何時にても日本国内に軍隊を進駐すると共に軍事基地を使用出来る」との文書を9月13日に提示した。マッカーサーの頭ごしの提案であり、片山は少しも知らなかった。芦田なりの政権取り工作であった。

さすがに秀才の芦田も、すでに4ヶ月前、昭和天皇が同様の要請をアメリカに行っていることを知らなかった。代わって今度は、西尾と組んで芦田内閣の実現にいそしむことにした。

0・8 補正予算問題

補正予算問題については、幾つかに分けて執筆せざるを得なかった。大原社研の『雑誌』に数回社会主義政治経済研究所について書き、同研究所の機関誌『社会主義』、機関紙『政経通信』の復刻に際して長い「解題」を書かせられたからである。同じ内容を繰り返さないよう努力したといっても、自ずからそこには限界がある。

逆に、すでに執筆したと思いこんだり、新しい原資料がでてくるまで待とうと決めこんだりした部分もある。

簡単に経緯を説明しておこう。政治経済研究所に事務所をおく社会党左派の5月会は1947（昭和22）年12月に党内野党宣言を行った。翌48年1月の第3回大会では「四党政策の破棄」を僅差で可決した。提案者は伊藤好道、賛成演説は鈴木政務調査会長である。書記長選は浅沼稲次郎376票、加藤勤十330票で左派は破れたが、差は僅かであった。党執行部は、この現実を直視し、左派を入閣させるなど、事態の收拾を図るべきだった。幸いマッカーサーは片山に好意を抱いていた。

しかし、官房長官の西尾にはもはや片山を担ぐ意志はなく、芦田とともに政権の交代を策しつつあった。それに、吉田寄りを早くから公言していた大蔵次官池田勇人の思惑がからんだ。

片山内閣時代、GHQの経済科学局が経済政策の基本を決定していた。こと予算に関しては、財政課のリードが担当していた。正確な身分を訳すことは難しいが、財政課財政係長程度の男であった。これといった見識のある大した人間ではなかったが、大蔵省官吏はリードの意見はマッカーサーの見解であると意識的に曲解させ、これを利用しようとした。

『都留重人日誌』によると、「一月二二日（木）、マーカット（局長）、ファイン（経済顧問）、コーエン、和田、都留 民間所得税はねかえり、一応説明した所、マーカットも納得した形」とある。生活補給金の財源として安本案が認められたわけである。

ところが、大蔵省からすれば、原案が否定されただけでなく、予算に関する主導権を安本にとられたことになる。24日夜、都留氏によれば、池田勇人次官らがマーカットらを「それは盛大にもてなし」、安本のはねかえり案を覆し、料金値上げをふくむ大蔵案を飲ませてしまった。

都留氏は稲葉（安本総務長官官房次長）とともに26日か27日、西尾官房長官に会ったが、西尾は相手にせず、政府案を譲らなかつた。都留氏は、その時の口調で、西尾は芦田と組んで片山内閣を倒し、社会党右派と芦田で次期内閣をつくる約束をしているとの強い「心証」を得た。

29日、鉄道運賃、郵便料金の値上げなどを含む追加予算案が衆議院予算委員会に提出された。鈴木はマーカットに値上げ以外に種々の財源があるのではないかと交渉したが、相手にされなかつた。そこで、このままでは予算委員会は補正予算案を否決することになり、片山内閣は総辞職することになるだろうと、ホイットニー民政局長に訴えた。ホイットニーは秘書の手を煩わさずに、自由にマッカーサーのドアを開けることのできるただ一人の男だった。ホイットニーはマーカットと激論した結果、「こうなれば、政治問題であって財政問題ではない。今後の所管は民政局の権限である」とガチャンと電話をたたきつけた。そして「片山内閣を潰さないで処理するにはどうすれば良いか」と聞いたので、「委員会の採決に先立って政府が予算案を撤回し、代替りの財源を見つけて提出するようにしてもらいたい」と答えた。「宜しい、そういうことにします。政府へは、私から話します」と話は決まった。

ホイットニーも鈴木も、僅かな金額なので、簡単に済むだろうと思った。そこに落とし穴が待っていた。

おそらく後は有能な国会課長ウィリアムズに任せておけばよいと考えたのかもしれない。なお、民政局の政治課は48年2月に廃止され、立法課と合併して国会・政治課PPDとなった。大部分の他局と異なり、日本の全政党の政治家、あらゆるレベルの官僚、マッカーサー司令部の各部局と緊密な接触を保つ立場に置かれた。ウィリアムズにいわせれば、一種のリングサイドの観覧席だった（ウィリアムズ『マッカーサーの政治改革』89年、朝日新聞社）⁽¹⁰⁾。

彼の回想によると、PPDは、日本の立法過程に対するGHQの干渉を最小限にしようという民政局長の執拗な闘いを支え、部分的には成功した。ただ、この方針の最大の違反者は、規模がふくれあがって、管理の目が届きにくくなったESS経済科学局だった。占領目的に適合しないというだけの理由で、法案の提出を認めず、国会の役割をないがしろにした。地方自治体の掲示板の大きさを当局が決めた、と英字新聞は報じた。

西尾官房長官も、立法過程への過度の統制に言及し、内閣の法案提出の遅れに対する国会の苛立ち、各省庁提出法案を内閣が最終決定するためにGHQ各局の認可が遅いこと、新憲法下でも内閣に自由が乏しいことなどを訴えた。

有能なスタッフならば、1時間もあればやれる仕事を数週間、時には数ヶ月もかけて認可を遅らせた。ホイットニーは52年にかけて、この状況をかなり改善した。

既に拙論で述べたように、予算案内容について何の説明もせず、審議する時間も与えられず、す

(10) 芦田内閣の下で、鈴木は再び衆議院の予算委員会の委員長を務めることになった。本書簡は、片山内閣時代、ホイットニー民政局長の意を受けたウィリアムズ国会部長の世話になったことを示すものであろう。

ウヰリアム殿（二十三年五月二十一日提出）

ウヰリアム殿 五月二十七日 於軽井沢 衆議院予算委員長 鈴木 茂三郎

拝啓

その後、御無沙汰申上げて居ります。御健勝で、わが国会のため引きつづき御努力下さることを感謝いたします。

さて、私は再び衆議院の予算委員長に就任することとなりました。転地静養中でありますから、御挨拶に参上できず失礼いたします。

さきに次の二つの点について意見を述べたことがございます。

- 1 GHQと政府の間で予算案一切が決定され、国会に提案される事情もあってか、政府は重要な修正を許さない態度で国会にのぞんでくること
- 2 充分審査の期間なく、又資料も無いこと
- 3 右は、いづれも甚しく不都合であると思う

これについては、貴官より御好意ある御理解を得、リード氏と打ち合わせをすることになって居りましたが、そのまま私は委員長を辞任し今日に到りました。

然るに、昭和二十三年年度予算案については、衆議院予算委員会の審議に要する日時だけでも二十一日を要しますので、六月中に参議院をも通可せしめることは困難と存じます。かやうな事態は、政府の責任でありますから、私は、七月分の暫定予算を提出し、本予算に対する審議の期間を充分ユトリをもたすことが妥当と信じます。

尚又、本予算については、運賃、通信料の引上げ、新賃銀と新物価並びに取引高税、軽度財産税、勤労所得税の引下げその他の税制問題等、重要な問題があり、国会としては容易く政府案を承認し難いものがあるようでありまして、少くとも修正は免れ難いかと存じます

かやうな場合、GHQとの関係は、いかが取計ってよろしゅうございまいしょうか

予め、御指示をおねがひいたしたいのであります

私は、近日中には健康になって登院する予定ですが、登院の上はさっそくおたずねいたします

私欠席の際は、私に代わって社会党政務調査委員会の島田晋作、川島金次、稲村順三のうち、しかるべくお呼出しの上、御示教おねがひいたします（ほぼ原文）

ぐ予算委員会で決定しろというやり方について、ウィリアムズに善処するよう書簡を鈴木は書き送っていた。また、国会で運賃など公共料金などを決定できるように財政法第3条を施行するよう陳情していた。同じ内容の書簡をマーカットに送ったが、全く無視されてきた。

2月5日の『都留日誌』によると、和田と都留らがマーカットと会って、補正予算案の財源として民間所得税のはねかえりをあてて収支のバランスをとるので、料金引き上げは4月まで待つてほしいと要請した。ホイットニーに一喝されたマーカットは、均衡さえ得られればよい、料金引き上げは日本政府が言い出したことで、経済科学局から提案したことではない。代案があれば、夜でもよいから連絡してほしい。戦後のどの内閣よりも、われわれは現内閣を支持していると、態度を一変した。

となると、今度困るのは西尾と芦田の番となる。二人が片山に代わろうと策謀していること、できるだけ傷つけて追いこもうという池田の方針も狂ってくる。こういう舞台裏は、ホイットニーも鈴木も知らなかったようである。

社会党は代わりの財源を探すどころか、鈴木ら左派を執行委員会で抑えつけようとした。マアママ居士で知られる浅沼稲次郎新書記長のマアママもまだ調子がおかしかった。財源を新たに求めるが、運賃・料金の値上げも認めるといえるのでは妥協案にもならない。6日の午前中閣議が開かれたが、すぐ散会してしまった。鈴木は栗栖蔵相を掴まえて何時新財源がきまるのか聞きただした。もぐもぐと訳の分からないことを喋ってすぐ姿を消し、2度と戻らなかった。西尾は、会議中に鈴木が一寸失礼といつてさっさと予算案の撤回を決めたと非難した。ところが、福永文夫氏の研究によると、午後黙って秘かにGHQへ出かけたのは西尾だった。何しに行ったのかは不明だが、新財源を探しに行ったとは思えない。

『勝間田清一国会証言録』によると、和田さんに呼ばれて「このままでは内閣が総辞職するおそれがあるぞ。至急都留君に会って新財源をさがしてこい。GHQの了解もとってこい」と命じられた。和田氏がどこまで事情に通じていたかは分からない。勝間田氏の証言を読むと、まだ政界入り以前のことで、組み替えれば総辞職になるぐらいは常識ですと語っているように、前後の経緯は全く知らない。

勝間田君がそんなことを言っているって。まだそんなことの出来る男ではなかったと、都留氏は一笑した。「だが、先生、何か良い案があれば持ってこい」とマーカットが言っているのに、何もされなかったのですか、とかなりしつこく私も食いさがつた。「既に西尾らのハラはよく分かっているんで、私は一切動かなかつた。他に稲葉君がいるが、彼も絶対に何もしていない筈だ。稲葉君も入院中であり、当時のことを知っている人はいなくなったな」と都留さんなりに一心に考えられたが、それ以上進展しなかつた。

唯一動いたのは勝間田清一だが、これも『国会証言録』を読むと、都留さんから新財源はみつかったよと連絡があつた。聞けば所得税のハネカエリ論だという。都留さんにしては筋の通らない案だと思つたが、すぐ長官に連絡した。もう遅い、既に委員会は予算案の撤回を決議したとの返事。ハネカエリ論は都留らの持論であり、一度経済科学局が認めながら、大蔵省が巻き返した曰く付きの案であり、とても新財源と呼べるものではなかつた。一秘書だつた勝間田はその経緯を全く知らなかつた。従つて、唯一の証言も崩されざるをえない。和田長官は、おそらく「万事窮す」とす

に達観していたのだろう。

他方、衆議院の予算委員会は、閣議を開いて栗栖か誰かが新財源を持ってくるのではないかと、開会を何度も遅らせ、ついに黒田寿男の提出した「予算の組み替え動議」を23対1で可決した。

『歴史と神戸』河合義一氏のケース

票数を問題に採り上げた時、神戸の小南浩一氏から「戦後の河合義一」(35-6号, 62.8)という貴重な資料を贈っていただいた。

確かこのあたりにしまったと、散々探したが見つからなかった。従って、河合氏について、かなりいい加減なことを書いてしまった。爾来気にかけてきたが、近代文学館、大原社研への寄贈を進めているうちに、漸く資料集の底にあった同書を発見することができた。小南氏には大変申し訳ないことをして、弁解の言葉も浮かばない。なお、神戸史学会では、鈴木が米騒動について話をしたことは聞いた覚えがあり、親しみを感じていた。

小南氏は兵庫県生まれ、社会党の結成大会に参加し、最後まで兵庫県連の顧問を続けた。日本農民組合後の賀川豊彦の全農に参加した。1946(昭和21)年の総選挙に立候補し落選した。続く47年の総選挙では最高点で当選した。補正予算案の決議に際して、山花秀雄は酒に酔っている河合を引っぱりこんだと回顧したが、キリスト教徒として酒、煙草とは一切縁がなかった。おそらく河合は予算委員として自らの意志を表明するために、無理をして出席し、動議に反対して起立しなかった。動議は23対1で可決された。反対はいうまでもなく河合だった。

芦田総辞職後の選挙は、汚職事件の直後ということもあり、河合は落選した。52年の選挙では、候補者を河合にするか、吉田賢一にするかが問題となり、吉田に落ちついた。53年の選挙は社会党の左右分裂下に行われた。衆議院選では右社から現職の吉田、左社からは河合の後継者田中武夫が立った。ところが続く参議院選には河合が出馬し、右社の松沢兼人とともに当選した。左社は先ず大内兵衛法大総長の推薦を決め、断られて五島虎雄を口説いたがこれも失敗、河合にまわってきた。河合が引き受けたのは、憲法改正、再軍備という「逆コース」への危機意識であった。

このように深い事情も知らず、単純に河合義一について書いたことを、筆者と読者にお詫びしたい。

片山内閣の崩壊

2月6日には「片山内閣総辞職必至」の見通しが政界に有力となり、7日朝の各新聞はこの情勢を一齐に書き立てていた。内閣の大番頭の西尾が投げ出しの決意を固めたからである。

首相秘書官の山崎広は「西尾さんが総辞職をいったとき片山首相は実に不愉快な顔をした。首相があんな不愉快な顔をしたのは見たことがない。それは、場合によっては西尾だけをやめさせる気ではないかと思わせる空気だった。首相はあの段階でやめるような気はみじんもなかった」、総辞職を非常に残念がり、西尾を憎むことはなはだしかった、と回顧した。漸く西尾の陰謀の一端に気づいたのではなからうか。

鈴木は鈴木で、補正予算の金額は僅かであり、しかも予算案を否決したのではなく、ホイットニ

ーに約束したとおり、予算案を白紙撤回しただけであり、まさか片山が辞めるとは思いもよらなかった。鈴木は『朝日新聞』に、西尾は芦田新党工作にかなり深入りし、これを助けて政権たらい回しを考えた為に、民主党に圧されていると解説した。昨日まで左派の入閣に反対していた民主党幹部は、鰻の匂いをかいだ途端に、左派入閣説を唱えだした。

ホイットニーの心境も平坦ではなかった。白紙撤回させればうまくいくと信じていたのに、新財源を探させるべきだったと後悔した。

『都留日誌』によると、11日夜マッカーサーは片山と会談し、マッカーサーからもう一度やれといったらやると聞かれ、左派を入れて強力なものにしないと纏めにいくと答えたところ、左派を入れてよいと言われたそうである。

元経済企画庁の矢野智雄氏が断定したように、この事件は西尾の「左派に対するクーデター」であった。

なお、補正予算案は、6日に政府案を破棄し、前年度剰余金、所得税のはねかえり、経費の削減などを財源として、2月24日片山内閣の手で国会に提出、同日成立した。これは安本案であり、値上げ案に固執する必要は何もなかった。しかも、決算の結果、税収が予想を大幅に上回り、安本案ですら不要だった。ESSと大蔵省が意図的に間違えたかどうかは、今となっては分からない。

これより先の2月7日、マーカットやウィリアムズに鈴木が要求しつづけてきた財政法第3条の施行を「覚書」で認めてきた。GHQ内部のショックも大きかったのであろう。

マッカーサーから不信任決議もされていないのに何故辞任するのかと反問されたのにもかかわらず、2月10日、片山内閣は総辞職した。

当時、『朝日新聞』記者だった松岡英夫氏が指摘したように、政権を握った社会党が何故大蔵大臣のポストを獲得しなかったのだろうか。人材難という事情もあるが、その代わりに民主党がおしたそれほど財政家とも矢野庄太郎を簡単にのみ、脳出血で倒れた後には興銀の栗栖を就任させた。栗栖はそれ程能力はなく、大蔵省ですっかり浮き上がってしまった。片山は水谷長三郎を押ししたが、当人は商工大臣を望んだ。せめてオシの強い水谷がなっていれば、ある程度大蔵省をおさえつけ、内閣を倒す策謀を封じることができたのではなかろうか。かくて片山・芦田内閣時代に、大蔵省を軸とする日本の官僚制度が復活し、政官癒着の構造が確立した。社会党の幹部にはそんな意識は少しもなかったのは残念である。党内に適任者がいないならば、政党外から選ぶ手が幾つもあった。

うまくいったかどうかは保証しないが、吉田が頼んできた和田博雄氏を蔵相に選び、有沢氏を安本総務長官に選べば、事態はかなり変わったのではなかろうか。それが出来るような人物であれば、むざむざと首を切られるようなこともなかったろうが。

余談はさておき、新聞報道によると、辞職後に片山と鈴木は急速に親しくなり、西尾をやきもきさせたそうである。芦田首相、片山副総理を狙っていたが、「片山は僕は副総理にはならない、鈴木君は大蔵大臣になると思っていたが、どうしても嫌だというならば仕方がないな」など話していたそうである。

（すずき・てつぞう）